

序

ジェイ・ルービン

アーサー・ウェイリーの訳を読んで、私は初めて「能」に接した。「能」は「日本文学」の一部をなすものだが、しかし「能」イコール「文学」ではない。「能」はあくまで上演されるべきものと弁えたうえで、長年アメリカの大学で、謡曲の文学的要素に重きを置いて教鞭を取ってきた。そのうちにある疑念が湧いてきた。つまり、能を専門とする学者や能の上演を毎日の生活とする能楽師に、私の能楽観はどのように映るのだろうか、という疑念である。

そこで、日本の能楽研究者と実際に舞台にあがる能楽師の数名をお招きして、ともに謡曲を読んで話し合えるような共同研究の設立を提案した。幸い国際日本文化研究センターが、私のこの異色といつてよい提案を受け入れてくれた。こうして二〇〇〇年六月から二〇〇一年三月まで、毎回二日間にわたる研究会があわせて五回開催された。

各分野からの人たちが一部屋に集まって話し始めると、活発な議論が沸き起こり、それは意外な方向へと展開していった。代表者として私は自分の文学的関心から話題を提供したが、議論は音楽や舞、さらには歴史的な背景や経緯にまで広がって、それは刺激的だった。こんなに面白い研究会もあるのか、と思ったほどだ。参加者のおひとり、田代先生は、謡曲を文学として見る私の見方に近いのだが、はたしてそうした見方が、法政大学能楽研究所の西野先生と衝突はしまいか、と私

はいささか心配だった。ところが図らずもおふたりは旧知の仲であられ、たいへんに気持ちのよいやり取りが交わされた。そこにほかの参加者も積極的に加わり、和気藹々たる雰囲気のなかで議論ができた。とりわけ学者のみならず能楽師の皆さんも、相互の交流から互いに新しい知見を得、意外な解釈に触発される機会を得たようだ。結果として、参加者全員が私の文学観をそのまま受け入れた、とまでは言えまいが、文学研究でよく取り上げられる「テーマ」や「イメージ」の問題も真剣に議論されたことは、謡曲研究にいつそうの奥行きを与えたものと信じている。

これらの内容豊かな議論を、ひろく研究者や関心のある方々に活用いただきたい。そう考えて、研究会当日の録音テープを起こし、体裁を整え、発言者に自らの発言の舌足らずなところを補っていただき、さらに注や出典を補い、不要な枝葉を払うという編集作業に取り掛かった。あいにく録音には二度ほど失敗したため、せつかくの面白い議論で採録できないものがある。とはいえ本研究会のような企画は、日文研以外の研究機関では、おそらくは実現不可能だっただろう。その実績の幾分なりとも、こうして日文研叢書の一つとして、皆様に提供できるに至ったことを、研究代表者としてまことに幸せに思っている。

一人の正式な参加者は次の通りだった。私の様に能の文学としての重要性を信じる、『謡曲を讀む』（朝日選書、一九八七年）の著者、田代慶一郎筑波大学名誉教授。能楽研究界からは、野上記念法政大学能楽研究所所長の西野春雄教授、大阪大学大学院文学研究科芸術学講座演劇学研究室の天野文雄教授と大阪大学言語文化部のヨコタ村上ジェリー助教授（現教授）、*Dance in the Nô Theater* (Cornell University East Asia Papers, 1982) の著者で大谷大学とスタンフォード日本センターで日本の伝統芸能を教えるモニカ・ベーター教授。能に深い関心を持ちつつ比較文学・比較文化の見地から日本を研究する、京都造形芸術大学の芳賀徹学長、帝塚山学院大学文学部の佐伯順子（現同志社大学社会学部）教授、京都市立芸術大学附属日本伝統音楽研究センターのステイブ・G・

ネルソン助教（現法政大学文学部教授）、連歌を専門とする、日文研究部の光田和伸助教。他に県立長崎シーボルト大学のケネス・L・リチャード教授、広島大学大学院（当時）の大山範子氏、大手前大学大学院（当時）の小川佳世子氏。幹事は比較文学・比較文化・美術史・仏語仏文学を専門とする、日文研究部の稲賀繁美助教（現教授）。

能楽界からは、京都河村能舞台の河村晴久氏、静岡文化芸術大学の梅若猶彦助教の両観世流シテ方。笛方藤田流宗家藤田六郎兵衛氏。小鼓方大倉流宗家の大倉源次郎氏。

以上の方々のうち、河村氏は能楽界への紹介と研究会全体の計画の面で大いに活躍してくださいました。小川氏にはテープ起こしをお手伝いいただき、大山氏にはテープ起こしの整理・編集・注釈の面でご助力をいただいた。更に田代教授と西野教授はテープに起こした原稿の編集作業にご尽力くださいました。代表者としてこの方々に対して深甚なる謝意を表す次第である。